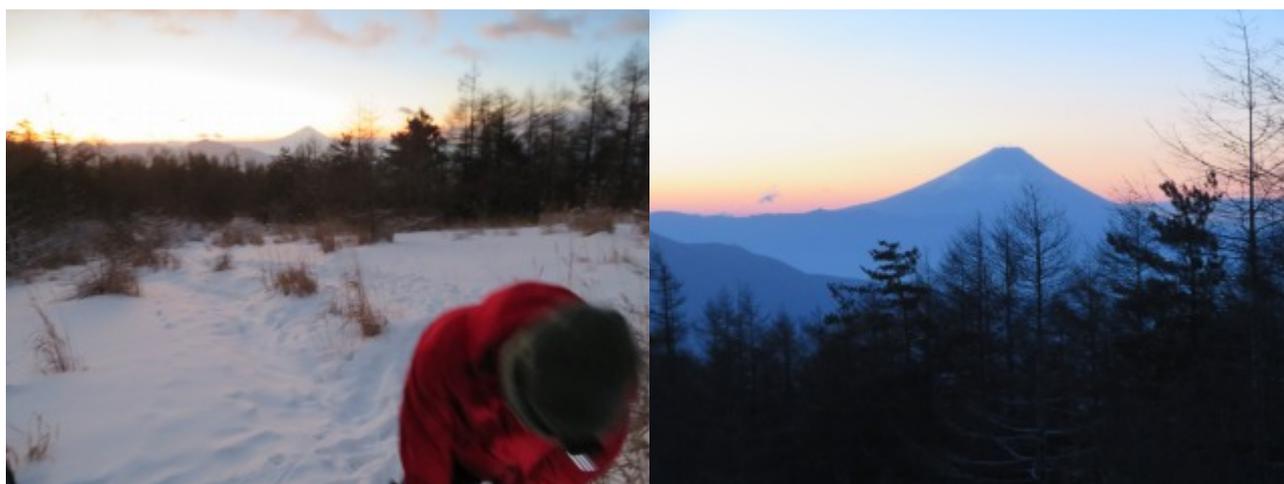


裾野麗峰山の会・山行報告書		文・写真 後藤
山行番	NO. 1962	
日時	2021年12月30日(木) 風雪	
山域	ハッ・権現岳(2715m)	
コース	天女山登山口5:15-天の河原-観音平分岐-前三ツ頭9:11-最高到達点・2390m9:35-天女山-登山口12:13	
標高差	上り・下り 登山口約1370m~最高到達点約2390m=約1020m	
藪漕度	上り・下り なし	
難易度	非常に困難 困難 レやや困難 普通 やや易しい 易しい	
権現様から、引導を渡される		
参加者	後藤・加藤、井上=3名	

昨年末も書いたが、ここ何年か、年末登山は、厳しい登山が続いている。今回は、特にそれを思い知った。私も2月で75歳。真剣に世代交代を認識する時だろう。



日の出

天女山登山口着。車が1台あった。車中にまだ人がいた。天気は良くなかった。風があり雪がパラパラしていた。今回は完全に天気を読み違えた。本来、計画は昨日上る予定だった。

昨日は風もない好天だった。1日ズラした訳は、29日はまだ気温が低い予報だったからだ。ところが、予報は外れて更に冬型が強くなった。

まだ暗かったのでヘッドランプで出発。下部の嫌な長いアプローチを暗いうちに済ませるのは嫌いでない。若いころは、1時発なんかザラだった。

前三ツ頭(2364m)の急登の取っ付き、標高約1900mまで防火帯のような地形が続く。登山口から標高差は約530m。長い割に高度を稼げない。権現岳の難しさはこんな所にある。しかも、標高約1900mから前三ツ頭まで、標高差約450mは超キツイ。

5:30、まだ暗い中上っていると、何処からか音楽が聞こえた。最初、スキー場かと思った。ナイターのスキーか?ただ、音源は近くだった。実はI君のスマホだった。

彼は5：30に目覚ましをセットしてあるという。その後も目覚ましは、6：00、6：30と続き、一体いつまで続くのと笑ってしまった。ようやく明るくなった。日の出だった。下部はガスはなかった。一息入れ、ランプを仕舞う。南方は快晴。富士山が大きかった。



厳しい前三ツ頭の上り

前三ツ頭上り手前でトップをI君に任せる。I君は、ガンガン上って行く。このところ全ての山に参加しているので絶好調の様子。加えて先日、私と一緒にローバ最高級冬靴を新調した。I君が



新しい靴

今まで履いていた革靴は、片足約1.5kgと重かった。ローバは、約950g。相当の軽量化が出来た。絶好調の要因でもあった。

新しい靴は、軽量だけでなく防寒も備えていた。同行のK姉御が「足先が冷たい」と嘆いていたが、我々の靴は、全く問題なかった。やはり、新しい素材の靴は素晴らしかった。ただ、今回、手は冷たかった。いつも最初冷えるが次第に蘇って温くなるが、手袋はアンダー2枚、5本指のオーバー手袋1枚だが、全くダメだった。K姉御に二股のオーバー手袋を借りる始末。これは改善が必要だ。

前三ツ頭の上りからガスが覆って来た。風も唸り出した。風雪の山は久しぶり。体は重かった。昨夜、飲み過ぎだったか。I君は、吹き溜まりの膝上の深いラッセルをモノとせず、ガシガシ上って行く。頼もしい。見ていて気持ちが良い上りだった。彼は、来年1月で52歳。私は2月で75歳。いつまでも馬力を維持出来るわけではない。



ゴルゴ13 (I君)

K姉御

厳しい上りをこなして、漸く見覚えのある、前三ツ頭着。上の尾根は、モーレツな吹雪だった。「地獄モード」に突入。後ろから50半ばの男性が1名やって来た。我々を抜かしてラッセルをしてくれと思いきや、彼は休んでしまった。それでも、「ラッセルの礼」は言った。

最近、この「ラッセルの礼」を欠く輩が多い。雪山登山は、ラッセル如何で楽だったり、苦しかったりする。ラッセルがあれば、例え出発がトップから2時間遅くても最後は追いつく。それだけトップは労力が大きく、後発は楽に上れる。

後ろから、意識的にタラタラ上るのは、登山の醍醐味を欠く上に「ラッセル泥棒」と良くは言われない。しかし、これは一つの「モラルの問題」で勿論、礼を言う義務はない。

尾根手前で空腹を満たした。今朝は、4時起床ですぐ朝食だった。既に5時間経過しているから腹は減る訳だ。完全装備で尾根に出る。前三ツ頭から三ツ頭で標高差は約215m。前回の快晴時で約1時間掛かった。今回のこの天気では、順調でも1時間半は掛かるだろう。

しかも、吹きすさぶ雪は、妙に湿った重い雪だった。顔にバシバシ当たると痛くて堪らない。そういえば、この日は朝から気温が高かった。依然として、I君が頑張っって引っ張る。ドンドン先に進むと姿が霞んでしまった。

大声で呼び止め、「どうするか」相談する。初見のI君には、せめて三ツ頭まで上って欲しかった。ただ、この暴風雪で上り1時間半耐えられるだろうか。勿論、その帰りもある。

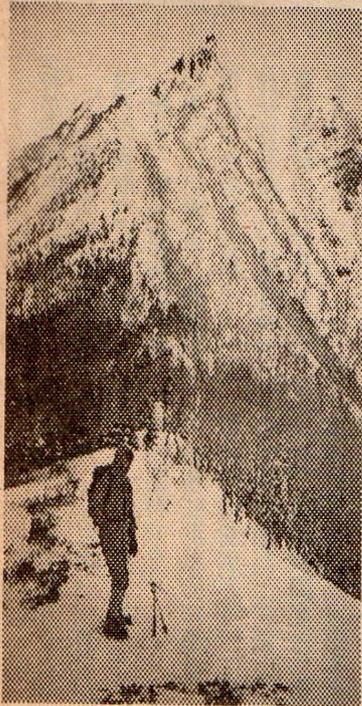
登山 人いきざ

金峰山の上空が深紅に燃える日の出

◆八ヶ岳・権現岳

▽2月22～23日▽静岡・三島勤労者山岳会 後藤隆徳、栗原一郎

22日9時、車で三島を出発。籠坂峠、御坂峠を越え、中央道、八ヶ岳横断道を経て、天女山登山口へ12時。車を置き、12時15分出発。雪は20センチほど。天気は快晴。人気のある山らしく、トレイルはついている。ひとしきり登ると天女山に着く。ここで昼食。



モルゲンロートに染まる権現岳

くが、スキーを持ってこなかったことを悔やむ。はるかかなた、青い空をバックに権現岳(二七〇四)が光る。そのとなりに盟主赤岳が鎮座している。きょうはなんとかがんばって二二六四の前三ツ頭までと思うが、荷が重くてピッチが上がる。結局この日は二二五〇地点まで。1時半。

質素だが、あたたかいものを腹いっぱい食べる。きょうはたまたま私の39回目の誕生日。これからもますますがんばって登山を続けるよう心新たに誓う。

23日、3時起床。気温は氷点下15度ほど。朝食後、輪かんとアイゼンで出発。まだ暗いのでヘッドランプをつけて進む。快晴で、頭上にはオリ

オン座が光っている。

20分ほどで前三ツ頭へ。稜(りょう)線へ出ると風が非常に強い。トレールもこの風のため消えている。6時15分待望の三ツ頭へ着く。ちょうど夜明けで、東の金峰山の上空が深紅に燃える美しい日の出だ。

眼前には巨大な権現岳と赤岳がそびえ、モルゲンロートに染まっていく。なんと美しいさだ。パートナーも足をとめ、立ちつくしている。三ツ頭を越え、本峰にアタック。頂上直下で岩壁の基部を左にトラバースし、左の稜へ出る。ここは雪がびっしりあり、豪快にラッセルしていく。頂上は目の前で、5分ほどで到着。風が強く寒い。一点の雲もない素晴らしい展望だ。白山、妙高などもよく見える。

記念撮影をし、早々に下山。さきほどのトラバース地点まで戻り、パンを食べる。下りもつぼ足ではかなりもぐるので、輪かんをつける。ベースへは簡単に着いた。テントを撤収し、ふたたび下山。登山口へは11時半着。里は春のように暖かかった。

(後藤隆徳)

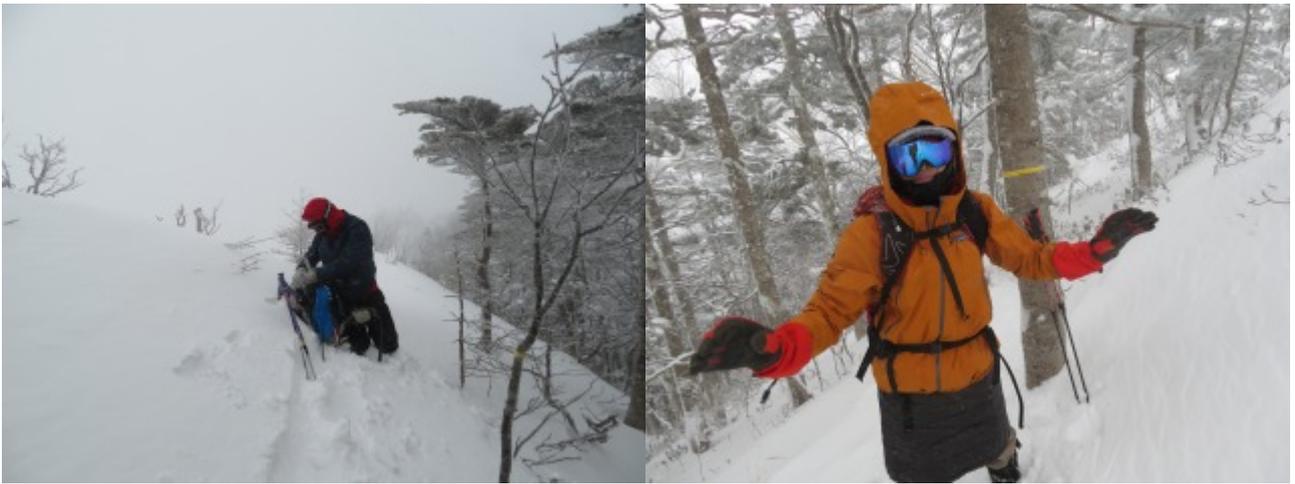
1986/3 しんぶんA

(冬に初めて権現岳に上ったのは、1986年2月22～23日。当時は、三島労山だった。丁度、39歳の誕生日だった。コースは今回と同じ、天女山登山口から往復。相方は、冬の北鎌、奥穂、常念、など共にしたKさん。

記録では、前三ツ頭までの予定だったが、手前で幕営した。頂上を落し、下山もワカンを使ったとあるので、雪は多かったようだ。登山口11時半は、いいペースだった。ま、元気が良ければ、山中一泊が良いだろう)

フッと先日、知人の仲間が、白山でやはり地獄の中、頂上に辿り着いたが、亡くなったことを思い出した。頂上に着いたが、既に引き返す余力が無かったのだろう。最悪の結果で、そんな登頂が何の意味があったのだろうか。

昨年末もそうだったが、「無理・無茶・無謀」は、「遭難と紙一重」だ。ここは、捲土重来、潔く引き返すことだろう。そう決まれば、撤退は速い。すぐ下に例の彼がいた。結果、彼も後に下って来た。「自分はラッセルがなければ、あそこまで上れなかった」と礼を言った。



前三ッ頭直下



2020/01/16 快晴の三ッ頭

そのすぐ下で、もう1名男子が上って来た。彼は無言だった。後で会わなかったなので、結果は不明。下りは楽で速い。途中で地元の単独の女性に会った。地元なので、ブラブラ、前三ッまでと言った。盛んに「下りのラッセルをお願いします」と発言。

下りで雪が多くない場所は、アイゼンが岩に当たりバランスを崩す。トップで下っていて、岩に引っ掛かり、頭から大コケした。急坂が終わったので、アイゼンを脱ぎ、行動食を食べる。K姉御推薦の「温かいホットお汁粉」がサイコーに美味しかった。



地元の単独女性



食事



地元のシバタさん



革靴

食事後も男性1名と会った。時間的に遅い。最初から頂上の計画ではないだろう。急坂を下り切って防火帯に差し掛かる頃、やはり地元のシバタさんに会った。白髭が似合う温和な感じの方だった。お歳は78歳。今年、権現は26回目と言った。

今回は、三ツ頭まで。家にいるとWが五月蠅とのこと。元々、東京だったが、千枚田の指導でこちらに移り住んだと言う。結構、長々話し込んでしまった。このような年配の方が、今も歩いているのは心強く嬉しい。靴は、しっかりした革靴だった。



2020/01/16



2020/01/16

今回は、I君と上り、己の力の無さを痛感した。以前、あるベテランの方に「山の引き際は、いつだろうか?」と聞かれた。そんな時、私がいつも言っているのは、それは「山が教えてくれる」だった。今回は、正にそれだった。

初めての冬山は、1968年だった。爾来、54年頑張ってきた。今回、若く馬力がある後継者が現われた。今後を任せるには、丁度、良い機会だ。

今回は、「権現さまから引導を渡された」のだ。引き際を「権現さまが教えてくれた」有難いことと受け止めたい。

以上

